

IMAGE LIBRARY NEWS



イメージライブラリー・ニュース 2009年6月 第25号

- 「映画を見る」ということ
- セルロイドの夢—フィルムで観るNFBアニメーション
- IMAGE LIBRARY 情報
- イメージ・コレクション其之三

イメージライブラリー・ニュースは映像に関する情報誌です。
バックナンバーは館内でご覧になります。

「映画を見る」ということ

映画『女と男のいる舗道』の中に、アンナ・カリーナ演じる主人公ナナが映画館に立ち寄る有名なシーンがある。上映作品はカール・ドライヤー監督の『裁かるゝジャンヌ』。映画館の暗がりの中で、ナナはフィルムが放つ光を一身に浴びる。その瞳からは、スクリーンに映し出される悲劇のヒロイン、ジャンヌ・ダルクと同様に大粒の涙がこぼれおちる。映画館を出てからも、ジャンヌとの相似が引き継がれたかのように、ナナは転落の一途をたどる。

映画には人生を変えてしまう魔力がある。『フランケンシュタイン』をくいいるように見つめる少女アナも(『ミツバチのささやき』)、『カサブランカ』をこよなく愛するうだつのあがらない映画批評家も(『ボギー！俺も男だ』)、それぞれ映画の幻影に寄り添われる。彼らのようにフランケンシュタインと心を通じ合わせたり、ハンフリー・ボガートから人生のアドバイスを受けたいのなら、私たちは映画館に足を運ばなければならない。映画のイニシエーションはいつでも映画館で達成されるからだ。

今日では携帯電話で簡単に映画を見ることも可能だが、映画誕生の瞬間を振り返れば、携帯の小さなディスプレイがどれほど「映画」にそぐわいかがよくわかる。映画史の起点は1895年12月28日。その日、リュミエール兄弟が開発したシネマトグラフによるフィルム上映がパリのグラン・カフェで開催された。そこで上映された10本ほどの作品の中で、最初に上映された『工場の出口』が、世界初の映画といわれている。

しかしそれ以前にも、人間は自らの視覚を満足させるために多くの映像にまつわる玩具や装置を発明していた。17世紀末に写生に利用されたカメラ・オブスクーラもそのひとつ。カメラ・オブスクーラの内部では、小穴から差し込む光が外の風景の上下左右さかさまの像を結ぶ。画家たちはその中を覗き込み、そこに投影された像をなぞることによって、風景の正確な遠近感を表現することができた。写真用カメラの原点、つまりは映画用カメラの原点でもあるその暗箱は、映写室の小窓からフィルムが投影される映画館の内部とそっくりだ。

『工場の出口』の直前、1891年にエジソンが発明したキネトスコープは、箱の内部でフィルムが廻るのを覗き見る装置だ。シカゴ万国博覧会にも出展されたキネトスコープは世界的な人気を博したが、「映画」にはなり得なかった。工場の出口から出てくる人々の姿を捉えただけの素朴な映像を「映画」たらしめた要素とは、大きなスクリーンに投影されたその映像を多くの観客たちが同時に共有したからにはほかならない。1895年という年が映画の歴史において華々しい輝きを保持し続けるのは、「動く写真」が投影というシステムを手に入れたからなのだ。暗闇の中で感覚をとぎすまし、見知らぬ人たちとともに映像を見るという非日常的な体験こそが映画の醍醐味といえる。

手軽に映画を見られる、もしくは作れてしまう時代だからこそ映画評論家のコメントは辛口だ。カイエ・デュ・シネマ誌の編集長であるジャン=ミシェル・フロドン氏は、現代の氾濫する映像を「映画の実践」ではなく「オーディオビジュアルの実践」とし、「上映されたい」という欲求を持っているものが映画なのだ」と語っている(*1)。また、2008年にイメージライブラリーの講座で講演していただいた梅本洋一氏も、こんな言葉を残してくれた。「DVDで見るのは画集で見るのと同じです。(略)画集で見ればいろんなことを覚えられるし、いろんな知識も得られるけど、本物を見た方がいい。」(*2)

息をひそめ微動だもせず、『女と男のいる舗道』のナナはスクリーンを見つめる。彼女の瞳に映るのは、大きく引き伸ばされることで初めて肉眼にさらされるフィルムのマチエール、闇から光までをつなぐ銀粒子の繊細な筆致——本物の『裁かるゝジャンヌ』だ。

映画という身体的体験を得るために、暗箱の中を覗くのではなく、彼女と同じように、自分自身がそのシステムの内部に入るしかない。暗箱の世界の住人になるしかないのだ。そのとき初めて、映画は私たちに至福の瞬間を与えてくれる。(文=木村美佐子)

フィルムに刻まれた、映画を見るまなざし。
時にそれは観客にとって「映画を見る」ということの至高のレッスンとなる。



『女と男のいる舗道』ジャン=リュック・ゴダール 1962



『ボギー！俺も男だ』ハーバート・ロス 1942

(*1) 映画美学校において2009年1月29日に開催された講演「映像配信の時代における映画上映について」より引用。

(*2) 第29回課外講座「ヌーベルヴァーグ再考」より引用。イメージライブラリーHPにて講座の記録を掲載しています。

お知らせ
造形研究センター第31回映像講座
「セルロイドの夢—フィルムで観るNFBアニメーション」を開催いたします。
日時：2009.6.29 (mon) 16:40～
会場：1号館 104教室
講師：西本企良（視覚伝達デザイン学科教授、造形研究センター研究者）



欲張りブルージェイ

1974年／イブリン・ランパート／7分35秒

欲張りなブルージェイ（青カケス）の物語。鮮やかな色彩の切り紙で作られた鳥や昆虫たちの、口ばしや尾の震えなどの細かな動作からは、動物たちの息遣いまで伝わってくるようだ。



ビギニングス

1981年／Clorinda Wainy、スザンヌ・ジエルヴェ、リナ・ガニオン／8分48秒

朝焼けの大地、海岸線や大地の輪郭が溶けるように動き出すとそこに男女の姿が現れる。すべての境界線が移ろい続け、淡い光と色彩の中で様々なイメージが夢の様に浮かんでは消える。



パラダイス

1984年／イシュ・パテル／15分

インドの古い詩を基にした、豪華な宮殿の中で飼われている美しい鳥と、自由な野生の鳥の物語。鮮やかな密林の色彩と、暗い宮殿の奥深くで瞬く光。その華やかさに圧倒される。

©National Film Board of Canada. Reproduced with permission of the NFB from <www.nfb.ca>.

IMAGE LIBRARY 通信

イメージライブラリーのホームページ・検索システムが新しくなりました

造形研究センターの事業の一環として、2009年4月よりイメージライブラリーのHP・検索システムをリニューアルいたしました。所蔵作品をより検索しやすくなった他、過去の講座の記録やweb版イメージライブラリー・ニュースなども掲載しています。これからもどんどん内容を充実させていく予定です。皆さんの制作や研究にぜひお役立てください。http://imagelib-dsvr10.musabi.ac.jp/img-lib/（学内専用）

チェコ・アニメーション作家イジー・バルタ氏が来校しました！

造形研究センター第30回イメージライブラリー映像講座「イジー・バルタの世界 間に描くユーモア・アイロニー・ファンタジー」報告

2009年3月22日、現代チェコ・アニメーションを代表する作家イジー・バルタ氏と、氏の新作「屋根裏のボムネンカ」のプロデューサー、ミロスラフ・シュミットマイエル氏をお招きし、映像講座を開催いたしました。お話はチェコのアニメーション史やアニメーション事情、バルタ氏の創作の秘密にまで及び、多様なアニメーション技法を自在に開拓するバルタ氏の創作への想いに、その作品の魅力の根源を見たように思います。終了予定時間を大幅に過ぎながらも尽きないお話に、参加者の皆さんも熱心に耳を傾けていました。本講座に多くなご協力をいただいた株式会社アットアームズ、通訳を務めてくださったチェコセンターのペトル・ホリー氏にこの場を借りてお礼を申し上げます。なお、この講座の記録はイメージライブラリーHPに掲載するほか、館内にて視聴可能にする予定です。詳しくはスタッフにお尋ねください。



東京国立近代美術館フィルムセンター(NFC)相模原分館を見学してきました

フィルムは、その素材の特性から劣化を避けることが難しいメディアです。イメージライブラリーでは湿度管理が可能なキャビネットにフィルムを保管していますが、より効果的に劣化を防ぐ方法を学ぶため、NFCのフィルム保管専用施設である相模原分館を見学してきました。

NFC相模原分館は、本学4号館を設計した建築家・芦原信義氏が手がけた低層の建築ですが、地下には2階層のフィルム保管庫が隠れています。これは、温度や湿度に敏感なフィルムをより良い状態で保管するための工夫で、保管庫内部は常に摂氏約10℃（地下2階は5℃）、湿度約40%に保たれ、24時間体制の集中管理が行われています。ここには2000フィート巻の35ミリフィルムを約12万巻収藏可能で、NFC所蔵フィルムや映画会社から寄託されたフィルムが保管されています。これらのフィルムは、館内に設置されたフィルム検査室で手作業によって1本1本巻き直しデータベース化されます。この日は3名の検査員の方が検査機の前で作業していましたが、1日に処理できるのは30、40分の映画で3、4本とのことです。気の遠くなるような作業ですが、それだけにフィルムを保存していくことにかける情熱を感じました。デジタルメディアが世の中を席巻している中、フィルムがなぜこんなにも重要視されているのでしょうか？

意外ですが、フィルムは今のところ映像にとって最良の長期保存メディアと言われています。フィルムは物理的・科学的に脆い素材でありながらも、適正に保管することによって何世紀にも渡って保管することができ、さらに高解像度メディアとしての可能性を秘めています。過去のある瞬間を記録し未来に引き継ぐことができるフィルムは、かけがえのない文化遺産だということができるでしょう。

私たちは、ここで学んだことを踏まえ、所蔵する全てのフィルムのビニガーシンドローム（酸化現象）のチェックを2008年度に完了しました。今後も、より良い状態でのフィルム保管に努めて参ります。見学を受け入れてくださった東京国立近代美術館フィルムセンターならびに、ご案内いただいた研究員のとちぎあきら氏、検査員の方々にこの場を借りてお礼を申し上げます。



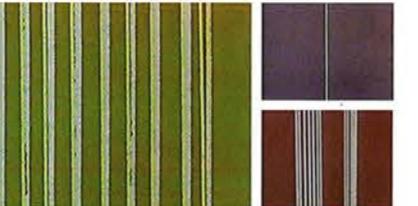
セルロイドの夢

— フィルムで観るNFBアニメーション

イメージライブラリーではNFBの映像作品を数多く収蔵しています。NFB(The National Film Board of Canada)は、1939年に設立されたカナダの国立映画制作機関で、広い国土に分散する多様な文化背景を持つ国民に向けてアニメーションやドキュメンタリーなど様々なジャンルの映画制作を行っています。第31回映像講座「セルロイドの夢—フィルムで観るNFBアニメーション」では、これらの収蔵作品からピックアップしたアニメーション作品の16mmフィルム上映をいたします。

NFBの作家たちは、このような誰もがかつて持っていた眼差しの力を信じ、映像によって多様な言語と文化が混在する自國の人々の心へ幅広く訴えようとしました。共通の価値や意味が簡単に見いだせない場所で、唯一人々が共有できるのは言葉や意味以前の「感じる」とにおいての共有体験であり、それは価値観の差異を超えて誰もが持ち得る「見る喜び」の原体験です。NFBのアニメーションの色彩やいきいきとした動きの美しさはそうした想いに支えられています。今回の映像講座では、NFBアニメーションの16ミリフィルム上映を行います。上映会場へ足を運び大きなスクリーンに投影された映像を暗闇の中で大勢の人と一緒に座つて見ることには、携帯電話やテレビで見ることの便利さや手軽さはないかもしれません。小さい画面はストーリーを行い、映し出された物事を理解するには大変便利ではありますが、NFBの作家たちの描いた世界を感じるためにかえって遠回りのように思えます。それは見ることのはじまりが理解することではなく、「感じる」という身体的な体験にあるからです。大きなスクリーンで映像を見ることは、映し出された映像に身体を委ねることです。それは私たちの記憶の底辺にある、見ることの体験、つまり「感じる」ことへ回帰する近道になるのではないでしょうか。

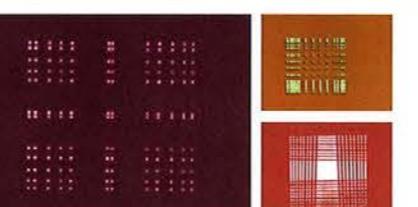
今回の上映は、視覚情報が過剰に溢れる今だからこそ、立ち止まって「見ること」の出発点に立ち帰り、情報に埋もれて見つけづらくなっている意味以前の世界の豊かさを見つめなおす機会になると思います。（文／久保田桂子）



垂直線

1960年／ノーマン・マクラレン、イブリン・ランパート／5分50秒

画面に現れた一本の垂直線が動きながら数本に分離していく。平面の画面にやがて奥行きのある広い空間が現れ、そこで垂直線たちが優美に踊るように運動する。



モザイク

1965年／ノーマン・マクラレン、イブリン・ランパート／5分

「垂直線」と同様に、シンプルな正方形の図形が動きだし、分離していく。やがて「垂直線」よりも奥深い空間と、その中に美しく運動するモザイクが立ち上がる。



シリニクス

1965年／ライアン・ラーキン／2分54秒

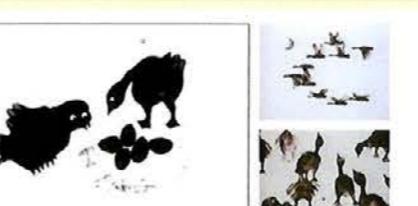
美しい水の精は牧神からの求愛を拒んだ末、自ら葦へと変身する。木炭の濃淡の中に浮かび上がる白は、冷たく滑らかな陶器の肌触りを思わせる。



パ・ドゥ・ドゥ

1968年／ノーマン・マクラレン／13分22秒

踊る男女のシルエットが、闇の中で光に照らされて浮かび上がる。フィルムに多重露光することにより、身体の流れるラインの軌跡が幾重にも重なり、画面に神秘的な像を結ぶ。



がちょうと結婚したふくろう

1974年／キャロライン・リーフ／7分38秒

イヌイットの民話を題材にした作品。音は彼らが狩りで使う動物寄せの鳴き真似を用いている。砂絵の柔らかいタッチのアニメーション技術により、砂粒の重さが翼の羽ばたきの軽やかさへと変化する。

NFBのアニメーション作品は、言葉やストーリーではない別のものによつていきいきと私たちに語りかけます。それは光や色彩、そして「動き」そのものです。砂や切り絵によつて表現された鳥の羽ばたきを見ていて、その色彩や羽ばたきの動きそのものに心を捕えられ、ストーリーなど忘れてしまう瞬間が何度もあります。

こうした色彩や動きといったものに対する感覚、物事が持つ意味とは関係のないところの、言葉で言い表せない何かいききとしたものに心を動かされるという体験は、誰もが幼い頃に経験したことがあるのではないか。まだ電車が乗り物だと知らなかつた頃、私たちの目に電車はただの動く四角い物体として映っていましたが、それは限りなく魅力的なものでした。大人になり、目の前に現れる様々な物事に対し、それをたどり前に意味を了解してしまうことが当たり前になつた頃には、そんな風にものを見つめ心を動かされることは少くなりました。

NFBの作家たちは、このような誰もがかつて持っていた眼差しの力を信じ、映像によって多様な言語と文化が混在する自國の人々の心へ幅広く訴えようとした。共通の価値や意味が簡単に見いだせない場所で、唯一人々が共有できるのは言葉や意味以前の「感じる」とにおいての共有体験であり、それは価値観の差異を超えて誰もが持ち得る「見る喜び」の原体験です。NFBのアニメーションの色彩やいきいきとした動きの美しさはそうした想いに支えられています。

今回の映像講座では、NFBアニメーションの16ミリフィルム上映を行います。上映会場へ足を運び大きなスクリーンに投影された映像を暗闇の中で大勢の人と一緒に座つて見ることには、携帯電話やテレビで見ることの便利さや手軽さはないかもしれません。小さい画面はストーリーを行い、映し出された物事を理解するには大変便利ではありますが、NFBの作家たちの描いた世界を感じるためにかえって遠回りのように思えます。それは見ることのはじまりが理解することではなく、「感じる」という身体的な体験にあるからです。大きなスクリーンで映像を見ることは、映し出された映像に身体を委ねることです。それは私たちの記憶の底辺にある、見ることの体験、つまり「感じる」ことへ回帰する近道になるのではないでしょうか。

今回の上映は、視覚情報が過剰に溢れる今だからこそ、立ち止まって「見ること」の出発点に立ち帰り、情報に埋もれて見つけづらくなっている意味以前の世界の豊かさを見つめなおす機会になると思います。（文／久保田桂子）

Image Collection

人は映像にどんな思いをこめてきたのでしょうか。

映像は技術の進歩とともに変化してきました。

しかし高度な技術がなかった時代にも、「何かを見たい」「伝えたい」、あるいは「何かを表したい」という想いがありました。

このシリーズでは、映像玩具やフィルム、映写機などを収集される松本夏樹先生のコレクションを通じて、人間の映像に対する根源的な姿を巡っていきたいと思います。

イメージ・コレクション 其之三

『覗く愉悦』

松本 夏樹(武蔵野美術大学、大阪芸術大学非常勤講師)

再びイエズス会士エンゲルグラーフの『福音の光』挿図、丸鏡に映じた像としての寓意画である(図1)。神から聖体顯示台へと至った「福音の光」が、更に空中から突き出された手にあるレンズによって導かれる。見えざる神は人の子イエスとしてこの世に顕われる。ミサにおいて「命のパン」(ヨハネ、6-48)はキリストの聖体へと変じ、「世の光」(ヨハネ、8-12)として顯示される。その光は寓意画というレンズを通して集光され、悦びなき魂の闇中に神の心像を結ぶのである。不可視の神の顯現を覗く愉悦装置、イエズス会的光学の機巧を映す寓意画の鏡像。

ルネサンス建築や、バロック演劇の舞台装置に多用された、視覚遊戯の空間や詐術としての透視遠近法は、未だしも見えざる光の擬似的な再現と、異界を「見る」行為への畏怖を残していたが、18世紀啓蒙主義時代には、この世の中心たる人間の視覚、世界を定位する人の視線へと関心が移行していく(図2)。次の19世紀には、暗箱とレンズを通してこの世の一瞬の実像を定着させる技としての写真が、更には時間経過すらも連続写真の帶と投影光の中に收めようとして映画が登場する。

しかしながら、創造主と被造物たる人及び世界との疎隔を胎みつつも、媒介者としての光と視線の隠喩的イメージは、今日の映像メディア全盛を経てもなおアルタミラ壁画以来の「見ることの不可思議」を保持し続けている。レンズや小穴を通して異世界を覗く愉悦は、不变の「見えざる光」の源への遡行を含意しているのである(図3、4、5)。

注:図2のような透視画Perspectivesは、Optique(仏)、Diagonal viewing machine(英)と呼ばれた反射式覗き眼鏡の為に製作された。

このイメージコレクション連載を企画され、労を惜しまれなかった『イメージライブラリー』の下川久美香さん御逝去の報に接し、心から御冥福をお祈りいたします。松本夏樹



図3 阿蘭陀眼鏡 英泉画 (19世紀)

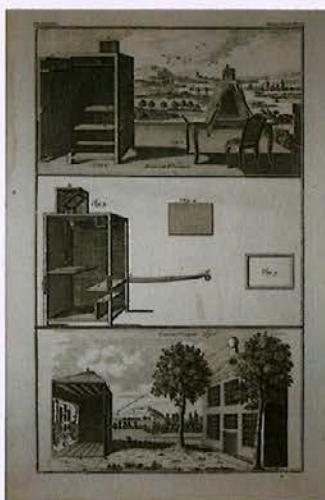


図4 カメラ・オブスクーラ (18世紀)



図5 実体鏡 (明治)

版画 所蔵: 松本夏樹

撮影: 原田正一

デジタル制作: 福島可奈子

IMAGE LIBRARY NEWS 第25号

発行日: 2009年6月26日

発行: 武蔵野美術大学美術資料図書館 イメージライブラリー

〒187-8505 東京都小平市小川町1-738 tel/fax: 042-342-6072

URL <http://imagelib-dsrl10.musabi.ac.jp/img-lib/> (学内専用)

編集委員: 板屋緑(武蔵野美術大学教授 造形研究センター

研究者)・狩野志歩・木村美佐子・久保田桂子・田中友紀子

© 2009 Musashino Art University Museum & Library All Right Reserved.

[禁無断複製・転載]

イメージライブラリー利用案内

月～金曜日…9:00～18:00

土曜日…9:00～17:00

閉館日：日曜日、祝日、春冬期休暇、芸術祭関連期間

・夏期休暇中は火曜日～金曜日 9:00～17:00 (月・土曜日は閉館)

・開館日・開館時間に変更がある場合は、その都度館内掲示、HPにてお知らせいたします。